シーン3

「……ふぅ、ふぅ……んっ……はぁ……♡」

「あっ……司祭君……起きちゃった？　夜中にごめんね……んっ……はぁ……♡」
「……ん？　大丈夫、だよ？　あたしは、大丈夫、なんだから……司祭君は、何の心配もしないで……あたしが、やさしくしてあげるからっ！」

「んふふっ♡　やっぱり、司祭君の、体ぁ……すっごく魅力的だよぉ……♡」
「もっと、美味しそうなお尻、見せてよぉ……♡」
「はぁ、はぁ、はぁ……ごめんねぇ♡」
「あたしのおちんちん、オナニーじゃ収まらなくなっちゃった……んっ♡」
「どうしようもなかったから、キミに頼ろうと思ってここに来たんだけど……」
「司祭君の寝てる顔見ちゃったら、我慢の限界が来ちゃったみたい、なんだぁ……♡」
「だから、司祭君……あたしのおちんちんが落ち着くために、協力して、くれるよね？」
「はぁ、はぁ、はぁ……ホント、美味しそうなお尻……♡」
「こんなに、弾力があるのに、キュって締まる感じが、ホントにもう……素敵だよぉ♡」
「お尻の穴の方は、どんな感じなのかなぁ？　ちょっと、味見させてもらうねぇ♡」
「はぁ、はぁっ、司祭君のお尻っ♡　アナル、すっごい綺麗だね♡」
「んちゅっ……んふっ♡　触っただけで、キュッキュってするんだねぇ♡　ちゅっ、ちゅくっ、ちゅぷっ、ちゅるるっ、ちゅっ」

「んっ♡　あは、使わせてもらうからね♡　綺麗にしないとダメだよね？」
「うん♡　あたしは大丈夫、呪いになんて流されてないよ？」
「んっ、ちゅっ、ちゅくっ……ちゅるちゅるちゅるっ、ちゅぱっ……んぁっ」
「はぁはぁ……んぁ♡　念入りに、清めてあげるねぇ♡　んふふふっ♡」
「ちゅくちゅ……んちゅっ、ちゅぷっ、ちゅるちゅるっ、ちゅっ、んっ♡　ちゅむっ、ちゅるるっ」
「ぬちゅっ、ぬりゅっ、ぬちゅりゅっ、んっ♡　ちゅくちゅるっ、んぁっ……はぁはぁ……」

「すごいよ♡　司祭君のアナル……♡　ふふっ♡　舐めるたび、舌先で触れるたびに、ヒクヒクしてるの♡」
「こんなのっ、反則だよぉ♡　はぁはぁ……♡　そんな誘ってるみたいな、反応されちゃったらさ……」
「もっとしてあげたくなっちゃうよぉ♡　はぁはぁ……♡　んっ♡」
「司祭君のアナル……ずっと舐めてたいよ……♡　ちゅくっ、ちゅっ、ちゅぷりゅっ」
「ちゅっちゅっちゅっ、ちゅぷりゅっ、じゅりゅっ、じゅぷっ、んっ♡　ぬちゅるっ、ぬりゅぬりゅっ」
「んじゅるっ、ちゅくちゅっ、ぬりゅっ、ぬじゅっ、にゅぶりゅっ、ぬちゅっ、ぬりゅりゅっ、ぬちゅっ、んっ♡」
「ぬじゅっ、ぬじゅぬじゅっ、じゅぷっ、んっあぁっ♡　はぁはぁ、はぁはぁ、あぁ、すごい♡」
「本当に、美味しそう……♡　キミのアナルに、あたしのおちんちん、入れたら……はぁはぁ……すっごく、気持ちいいんだろうなぁ……♡」

「ねぇ？　司祭君はどう思う？　あたしの目をちゃんと見てよ……ふふっ♡」
「すっごい息荒れてない？　お尻にあたしのおちんちん、入れられるの想像しちゃったのかな？」

「はぁ、はぁ、はぁ……んんっ♡　押し付けるだけ、押し付けるだけだから……」
「ああっ♡　すっごいよぉ♡　んっ♡　司祭君のアナル……♡」
「あたしのおちんちんの先っちょのところ、ヒクヒクしながらっ、刺激してくるの……んっ♡」
「ひぅっ♡　司祭君は、アナルに入れられたいのかなぁ？　はぁはぁ、んっ♡」

「こんなの、我慢、できるわけぇ、ないじゃないっ♡」

「んんんんっ♡　あぁっ♡　あっ、これっ……すごいぃっ♡　んんっ♡」
「司祭君のアナルぅ♡　中もトロットロだよぉっ♡　んんっ♡　すっごい、気持ちいいのぉっ♡」
「んっ、んんぅっ♡　はぁぁっ、あっ、あぅっ♡　締め付けるのっ♡　気持ちいいっ、気持ちいいよぉっ♡」
「キュキュウってっ、んんっ♡　おちんぽっ搾り取られるっ、みたいぃっ……んんっ♡あっ、あぁっ♡」
「あぁっ♡　ダメっ♡　これっ、ダメぇっ♡　気持ちっ、よすぎるぅっ……んんんぅっ♡」

「神よっ……あぁっ、神っ、さまぁっ♡　お許しくださいっ……んぐぅっ♡」

「お許しをっ……お許しをぉっ♡　んんぅっ♡　司祭君のっ、アナルぅっ……はぁはぁっ♡」

「気持ちよすぎてっ、あたしの体ぁっ、勝手に動いちゃってるぅっ♡　んんんっ♡　んんぅっ♡　んんんぅぅっ♡」

「こんなのっ、一回でもっ、経験したらぁっ♡　抗えるわけっ、ないぃっ♡　んっ♡　あっ♡　あぁっ♡」

「はぁはぁ……ねぇ、司祭君もぉ♡　そう、なんでしょぉ？　んんっ♡　一緒に、もっと、気持ちよくなりましょぉ♡」

「いっぱい、ベロベロしてあげるからぁっ♡　んちゅっ、ちゅっちゅっ、ちゅぷりゅっ♡」

「お耳もぉ♡　アナルと同じくらいっ、トロットロにしてあげるぅっ♡　んっ♡　ちゅっ、ちゅくっ、ちゅるぅっ♡」

「んぉっ♡　ちゅぷりゅっ、ぬりゅっ、ぬちゅぷっ、んんぅっ♡　ちゅっ、ぬじゅぬりゅっ、じゅぶりゅっ、じゅぷんっ♡」

「んんぁっ♡　あっ、あぁっ♡　すごいっ♡　すごいよぉっ♡　アナル、すっごく、締まるのぉっ♡」

「おちんぽっ、締め付けられるのっ、気持ちいいっ、気持ちいいっ♡」

「逆のお耳も舐めたらぁ、もっとキュッキュってアナル、締め付けてくれる？　はぁはぁ、んんんぅっ♡」

「おちんぽ、もっと気持ちよく、してくれるのかなぁ？　んふっ♡」

「……ちゅっ、ちゅぷっ、ぬちゅるっ、んぅっ♡　ちゅぷちゅぷっ、くちゅっ、ぬりゅっ、んんっ♡」
「んちゅっ、くちゅむちゅっ、ぬりゅりゅっ、ぬぶりゅっ、ぬちゅむっ、じゅぷじゅりゅっ、じゅむりゅぅっ」
「んっあぁっ、はぁはぁっ、くっ♡　んんぅっ♡　もっと、もっと舐めたいぃっ♡　司祭君の体ぁ♡」

「全部ぅ♡　気持ちいいっ♡　お尻ぃっ、ずっと気持ちいいっ、んっ♡　あぁっ♡　ズボズボするのっ、止まらないよぉっ♡」
「もっと、刺激してあげたら……はぁはぁ、たくさん気持ちよくなれるかなぁ？　ふふっ、ふふふっ♡　んんっ♡」
「首筋とかもっ……ちゅぷりゅっ、ぬちゅむっ、んんっ♡　舐めるとアナル締まるよぉっ♡　はぁはぁっ♡　じゃあ、ピンピン立ってる、乳首舐めたらぁ……司祭君はどうなっちゃうのかなぁ？」
「はぁぷっ♡　んちゅっ、ちゅるるっ、じゅるるっ、じゅるるるっ、んっ♡　じゅむじゅぷっ、じゅぷりゅっ、んんぅっ♡」
「んぉっ♡　ぬじゅむりゅっ、ぬちゅぷっ、くちゅくちゅっ、んんぅっ♡　んはぁっ……はぁはぁっ、んんぅっ♡」

「気持ちいいっ♡　んっ……♡　キミのアナル♡　すっごいよぉ♡　はぁ、はぁ、んんぅっ♡」
「体ぁ、ペロペロされると……んっ♡　くっ♡　すっごい強く、おちんぽ、締め付けてくれるんだねぇ……んんぅっ♡」

「はぁっ、はぁっ、んんぁっ♡　くっ、んんぅっ♡　あぁっ♡　気持ちいいっ、気持ちいいのがっ、止まらないよぉっ♡」
「おちんぽ、もっと、ジュボジュボってしたいっ♡　司祭君のっ、アナルでっ……んんんぅっ♡　搾り尽くされたいよぉっ♡」
「はぁ、はぁ、んっ♡　んっ、んっ、んんぅっ♡　あっ、あぅぅっ♡　あっ、あぁっ♡」
「ダメっ……このままだと、もうっ、出ちゃうぅっ♡　司祭君の中にっ、射精っ、しちゃうよぉっ♡」

「はぁっ、はぁっ、んんっ♡　あぁっ♡　ダメっ、ダメぇっ！♡　出したらっ、終わっちゃうっ♡　気持ちいいのっ、終わっちゃうってっ……」
「分かってるのにぃっ……んんんんぅっ♡　でも止まらないっ、止まらないのぉっ♡　あぁっ♡　ダメっ！♡　ダメぇっ！♡」
「神様っ、あぁっ♡　神よっ！　んんぅっ♡」
「ごめんなさいっ♡　ごめんなさいぃっ♡　んんぁっ♡」
「もう無理っ、無理ぃっ♡　出ます、出ちゃいますぅっ♡　んんんぅっ♡　あっ♡　あぁぁっ♡」
「んんんぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！♡♡」

「んっ♡　あぁっ♡　あぁっ……あっ、うぅっ……くっ……♡　んんぅぅっ♡　はぁっ……はぁっ……はぁっ……んぅっ……あぁっ♡」
「すっごいっ……出て、るぅっ……んっ、あぁっ……はぁっ、はぁ、はぁ……あぁっ……くっ……うぅっ♡」
「はぁ、はぁ、はぁ、ふぅ……♡」

「全部、キミの中に、出しちゃった……はぁ、はぁ……はぁ、ふふっ……♡」
「ねぇ？　司祭君？　抜かずに、そのままシていいよね？　うん、もう一回、キミの中に、ビュッビュってしちゃうね……んふっ♡」
「あぁっ、いいっ♡　いいよぉ♡　んんっ！　あぁっ！　キミもっ、すっごく、気持ちいいんでしょぉ♡」
「んんぅっ♡　あたしの中出しと、一緒にぃ♡　んんっ♡　司祭君も、いっぱい出しちゃってるねぇ♡」
「アナルに出されてっ♡　ひぅっ♡　気持ちよかったんだよね？　ね？　んんぅっ♡　いいっ♡　あぁっ♡　もっと、感じていいよぉっ♡」
「あたしもっ気持ちいいからぁっ♡　もっと、もっと、気持ちよくなってえぇっ！♡」

「はぁはぁっ、んぅっ♡　あぁっ♡　アナル気持ちいいっ♡　司祭君のぉっ、お尻ぃっ、すっごい搾り取ってくるのぉっ♡」
「んんんっ♡　ジュボジュボって、おちんぽにほじられてっ、キミも感じてるんだねぇっ♡　んぁっ♡　あぁっ、んっ、んんぅっ♡」
「司祭くぅんっ♡　もっと感じてぇぇ♡　はぁはぁっ♡　お耳もぉ、いっぱい、舐めてあげるからぁっ、はぁはぁっ……んんぅっ♡」
「ちゅくちゅっ、ぬりゅむっ、ぬりゅぬちゅっ、んぉっ♡　ちゅぷっ、ちゅぷちゅぷちゅっ、くちゅむりゅっ、んっ♡」
「ぬちゅぬりゅっ、ちゅっちゅっ、んっ♡　ちゅっ♡　んんぅっ♡　はぁはぁっ♡」
「あぁっ……神さまっ♡　神よ……んっ♡　ありがとうございますぅ♡　あたしにっ、こんなにもっ♡」

「素敵な機会を与えてくださりぃ、んぁっ♡　感謝しますっ♡　感謝しか、ない、ですぅっ♡」
「んぉっ♡　んっ、くぅっ♡　はぁはぁっ、はぁはぁっ♡」
「またぁっ♡　お腹の下の方ぉ♡　ゾクゾクして、きたぁ……　んんぅっ♡　あはぁっ♡　また、イっちゃうぅっ♡」
「イくっ、イっちゃぃ、ますぅっ♡　神様ぁっ♡　神っ、神よぉっ♡　祝福をっ、祝福をぉぉぉ♡　んぉっ♡」
「んんっ♡　んぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！！♡♡♡♡♡」

「あっ、うぅっ♡　んぅっ♡　あぁっ……あっ……あっ、うぅっ……んっ♡　はぁっ、はぁっはぁっ♡　あぁっ……♡」
「司祭、君のぉ、体がぁ……♡　あたしの、精液ぶっかけられて、真っ白にぃ……なってるぅ♡　はぁ、はぁ、はぁ……　んふふふっ♡」
「理解、しちゃった♡　あぁ、これが……これこそが、神の祝福なんだ♡　……ふふっ、司祭君、もそう思うでしょ？」

「あたしの精子で、ドロドロにされて、気持ちいい顔、してるもんねぇ♡　はぁ、はぁ、はぁ……　んぅっ♡」